

## 筑波山のムヨウラン

夏井 高人

ムヨウラン (*Lecanorchis japonica* Blume) は、光合成をする葉をもたず、落葉を分解する菌類から栄養を得て生きている菌根植物または菌従属栄養植物と呼ばれるタイプの植物に属する。かつては、腐生植物と呼ばれていたけれども、今ではこの名を用いないことになっているらしい。ムヨウランは、初夏～夏に地上に茎を出し、黄褐色の地味な花を咲かせる。しかし、それ以外の時期には地上には地表～地下で菌類のような生活をしているとのことで、その姿を見つけることはできない。生態それ自体が非常に奇妙な植物なのだが、正確なところはまだ完全には解明されていないらしい。

このようなまるでキノコのような生き方をする植物に何故自分が興味をもってしまったのかを説明するのは簡単ではない。単に「それが好みだ」としか言いようがないかもしれない。とにかく、1つでも多くの種類のムヨウランの仲間を観たいと思いつつ、①そもそも自生地が限定されていて「知っている人しか知らない」状態だし、②葉がないので、他の植物のように事前にその葉を見つけて見当をつけておくことが不可能で、③梅雨時期に開花するものが多いので雨の中で写真を撮影しに出かけることそれ自体が困難、④仮に開花時期に自生地に行っても、とても地味な花を咲かせるものが多くて枯葉の中でまぎれてしまい、発見することが難しく、④さりとて、特殊な菌類が広範に存在する場所でないことと生育しないことから鉢植えにして栽培することができず、それゆえに栽培品の花を観察することも不可能ということで、なかなか実物と出会うことができないでいた。

それでも、インターネット上のホームページやブログなどで関連記事をときどき見かけて、ムヨウランが筑波山に自生しているということを以前から知っていた。だから、どうにかして筑波山のムヨウランの自生地を特定し、その花を観たいと思っていた。問題は、一口に「筑波山」

と言っても結構大きな山なので、単純に山の中を探し回ったとしても絶対に探し当てることができないということにあるのではないかと思う。そうしているうちに、今年（2009年）に入って、ある方から「林道の脇に生えている」と教えていただくことができた。そこで、雨の日が続く6月の晴れ間の日、たまたま時間をとることができたので、筑波山までクルマを飛ばすことにした。

筑波山には何度も登ったことがあり、目的の場所は何度も通ったことがある。けれども、これまでムヨウランらしきものを目にしたことがなかったから、「本当かいな?」、「ガセネタではないのか?」と不安な気持ちが胸をよぎる。有料駐車場に到着してクルマを止め、登山の格好に着替え、教えられた林道をゆっくりと歩き始めた。その林道は、筑波山に何度か登山したことがある人なら誰でも知っている整備された道で、登山案内板にも公式の登山道の一つとして明瞭に書かれている。その道を歩きながらすれ違う登山者の数は少なくない。「こんなところに本当に生えているのだろうか?」という不安がますますつのる。でも、それは杞憂だった。歩き始めてそんなに時間が経っていないのに、針葉樹の林のところにさしかかったら、道端にムヨウランが生えており、ちゃんと開花しているのを見つけることができた。けれども、あまりにも簡単に見つけることができたので、「やった!」という喜びを感じたというよりは、むしろ啞然としてしまったと表現したほうが正確かもしれない。そして、「ここは何度も通ったことのある場所なのに、なんでこれまで気付かなかったのだろうか?」と、自分の観察力のなさを心から嘆く。

ともあれ、やっとのことで念願のムヨウランと出会えたので、早速道端にしゃがみこんで写真を撮り始めた。そうしている間にも何人かの登山客が背後を通り過ぎ、そのたびに「それ、何ですか?」と尋ねられる。簡単に説明してあげるが、誰も興味をもたないらしい。「ふ〜ん、随分と変わった植物なんですね」と言うくらいのもので、写真も撮らずにさっさと通り過ぎてしまう人が多かった。まあ、ランの仲間の中でも最も地味な部類に入るだろうから、それも仕方のないことだろうと思う。むしろ、「ムヨウランの花に人だかりができないほうが、面倒がなくて助か

る」というのが本音のところ。それ以上に、とても地味であるがゆえに普通の人の興味をひくことがなく、栽培不可能な植物だということを知らずに盗掘する人が現れる可能性が低いということを内心喜ぶ。

そうやってその花の写真を撮影し終わると、ちょっとだけ冷静になった。そして、落ち着いて周囲を見渡してみた。すると、すぐ近くに何株もムヨウランが生えているではないか。何年も幻のように追い求めた花のはずなのに、登山道のすぐ脇に当たり前のようにして群生している様子を目にすると、何となくがっかりしてしまう。

ちなみに、その場所は、比較的暗い林の中で光に乏しい。当然、写真を撮るにしても露出不足となりがちだ。しかし、ときおり木漏れ日がさすことがあり、瞬間的にムヨウランがとても美しく見えることがある。そのような場所に生えている個体を狙い、陽光が降り注ぐ瞬間を待って写真を撮った。コントラストが強すぎる写真になってしまったけれど、そのときの私の気持ちを正直に残すことができたようだ。

その場所では概ね1時間くらいを過ごした。念のためにその周囲を探してみたけれども、その群落のある場所以外にはただの1本のムヨウランも生えていないようだった。その場所は、せいぜい20~30メートルくらいの範囲しかない。やはり、「ムヨウランの自生地は、とても限定されているのだ」ということを実感する。その特殊な環境を大事にしなければならない。

このようにして筑波山のムヨウランを鑑賞した後、更にあちこち歩き回って山野草の写真を撮り、それから帰宅した。

その後、ランネットワークの観察会などの折に他の何種類かの菌根植物の花と出会うことができた。どれもこれも奇妙な植物ばかりで、そういう植物が好みの私としては大満足の1年だったと言ってよい。来年(2010年)は、更に奇妙な植物を求めて山野を歩き回ってみようと思う。



*Lecanorchis japonica*

[参考文献]

橋本 保 「A Taxonomic Review of the Japanese *Lecanorchis*  
(*Orchidaceae*)」 筑波実験植物園研究報告 9 pp.1-40 (1990)